

〔平成十二年度大会パネルセッション〕特別掲載・『麗気記』にみる中世

『麗気記』と〈註釈〉——中世註釈の言説世界から——

原 克 昭

一 はじめに

中世にはじつにさまざまなかたちで〈註釈〉という営為が行われた。『麗気記』もまた例外ではない。本報告では、『麗気記』と〈註釈〉というテーマのもと、まずは中世において『麗気記』がどのように認識されていたのかを見届けたうえで、『麗気記』にまつわる註釈書とその研究状況、そして中世註釈をめぐる資料性など、いくつかの問題を設定し考えなおしてみたい。

『麗気記』というテキストを現代の文脈に還元して読むだけではなく、中世という時代にあつて『麗気記』がいかに

に認識され解釈されてきたか、中世註釈の言説世界からさぐりあてる試みである。なお、本稿は「パネル要旨」という性格上、その梗概を示すにとどめざるをえない。各章で採り上げた各テーマの詳細については、それぞれ章末に掲げた拙稿においてふれている。

二 中世における『麗気記』認識

偽書・仮託書をめぐる議論は、最近衆目を集めている研究テーマのひとつである。とりわけ中世に簇出した一連の神祇書は、その殆どが〈仮託〉という擬装のもとに成り立ち享受された。『日本書紀』ですら、嵯峨天皇の勅により

仮名から真名へ再治されたという説が共有されていたことである(拙稿「中世神道と縁起——嵯峨天皇日本紀再治説」にまつわる覚書」『国文学解釈と鑑賞』第六三卷一、二号 一九九八・一二)。しかし、それをたんなる「僻説」として片付けてしまふわけにはいくまい。中世という時代環境において、それら神祇書がどのように認識されていたかを問ひ質すべきだろう。(註釈)という営為を揺り動かしたであろう刺戟(モチベーション)もそこにあるはずだからである。

『麗気記』の編者をめぐっては、一般的には①弘法大師空海仮託のイメージが強い。しかるに、それはもっぱら近世以降世上に流布した版本(寛文十二年(一六七二)刊)に「空海撰」と附されたことに拠る。げんに、近世に刊行された目録類では空海説が継承されている(本朝台祖撰述密部書目』『釈教諸師製作目録』『諸宗章疏録』『国朝書目』)。

②聖徳太子説は、おなじく聖徳太子に仮託された『先代旧事本紀』とならび、『麗気記』が一種の《正紀》として意識されていた形跡をしのげせる。この聖徳太子説を採択する諸書には書承関係が認められる点、一種の口伝として相承されていた説と窺測される(『天台名目類聚鈔』『補施集』『楊鴨晩筆』)。

③醍醐天皇説(神泉苑龍女授受説)である。醍醐天皇が神泉

苑の龍女より伝授されるというモチーフは、『麗気記』というテキストの《秘書性》のみならず、『麗気記』をめぐって(伝授)という形態がいかに尊重されていたかをよく物語っている。中世の『麗気記』註釈の多くがこの説に依拠していることも、そのことを示唆するところであろう(『麗気制作抄』『麗気聞書』『神官方并神仏一致抄』『弘法大師神代神祇抄』『神道書目録関白流』ほか)。

④役行者・弘法大師空海・伝教大師最澄・醍醐天皇共編説(『麗気記私鈔』)、⑤醍醐天皇―淨蔵説(『転輪聖王章内伝』)も、やはり同轍の発想にあるとみてよいだろう。つまり、醍醐天皇を筆受者として措定し、龍女を介して空海・最澄・役行者らの言談を書きとどめたもの、それが『麗気記』だという認識である。『麗気記』引用の初見とされる、度会家行撰『類聚神祇本源』(元応二年(一三三〇))において、『麗気記』が「本朝官家」として部類立てされていることも、それとけっして無縁ではあるまい。

※阿部泰郎「編」伊藤聡・原克昭・松尾恒一「翻刻・解題」『仁和寺資料』『神道篇』神道灌頂印信(名古屋大学比較人文学研究年報・第一集)二〇〇〇・三所収、拙稿「麗気記解題」参照

三 『麗氣記』古註釈とその研究状況

『麗氣記』の古註釈書としては、『麗氣制作抄』が比較的流布したらしく、『日本書紀私見聞（春璿本）』『神宮方并神仏一致抄』に抄録されているほか、神宮文庫蔵『鹿米抄』（「鹿米」は「麗氣」をもじった書名も同書だという。ほかに、了誉聖罔著『麗氣記私鈔』『麗氣記拾遺鈔』『麗氣記神図画私鈔』、良遍述『麗氣問書』『麗氣記抄』などがある。以下では、おもな『麗氣記』註釈書を個別に採り上げながら、その研究状況について瞥見しておくことにしたい。

『麗氣制作抄』（康応元年（一三八九）以前）

『麗氣制作抄』は神道大系『真言神道（上）』に鏤刻が収められる（ただし、康応元年（一三八九）舜俊書写の真福寺大須文庫本を転写した静嘉堂文庫本を底本とする）。その解題中において『制作抄』を「醍醐天皇に仮託した文献」と紹介するが、すでに指摘もありこれに適切ではない。劈頭に「延喜御門御作也」とあるのをふまえたらしく、げんに真福寺本の扉題下にも「延喜作」とあるが、本来これは被註書たる『麗氣記』の作者に関する条文とみるべきでところである。

構成は、〈麗氣灌頂〉に関する註文をはじめ『麗氣記』にまつわる事書がつづき、以下『麗氣記』十四巻におよぶ断片的な語註・訓註がつく。『麗氣記』をめぐる〈伝授〉という形態の尊重ぶりをよく物語るうえ、事書中にみえる諸伝承は歌語にも関わるなど、『制作抄』には閉ざされた儀礼空間と開かれた言説とが交錯する内容を持つ。なお、『制作抄』は『麗氣記』に関する註釈書としてかなり流布した形跡が窺える。春璿本『日本書紀私見聞』附巻『麗氣記抄』として収載（神宮文庫古典影印叢刊？）するほか、あとで採り上げる『神宮方并神仏一致抄』にも抄録されており、神宮文庫蔵『鹿米抄』（寛文九年（一六六九）写）も本書と同内容を持つ。また、南北朝期の書写奥を持つ日光天海蔵『日本書紀私見聞』や、新出の願教寺蔵『日本書紀私見聞』にも『麗氣記抄』が附載されていることが報告されている（願教寺主要資料紹介『国文学研究資料館調査研究紀要』第二号 二〇〇・九。また、諸本中には、若干ながら注目すべき異同が存するが、いまは省略にしたがう。

聖罔著『麗氣記私鈔』『麗氣記拾遺鈔』『麗氣記神図画私鈔』

（応永八年（一四〇一）ごろ）

中世浄土宗（鎮西派）の学匠である了誉聖罔（一三四一—一四二〇）は、『日本書紀私鈔』『麗氣記私鈔』『麗氣記拾遺

鈔』など神祇関係の註釈も手がけている。『私鈔』のツレとなる『拾遺鈔(奥抄とも)』奥書に、応永八年(一四〇一)の年記がみえることから、およその成立時期が知られる。『麗気記』十四卷に互って語註を施す『私鈔』は、問答体の体裁をとる『拾遺鈔』と併せて『麗気記』にもとづく一種の教判論を展開させる構成をとっている。

聖岡の『麗気記』註釈をはじめとする浄土教家の神祇思想に関する研究は、あたかも一種のブームのごとく、戦前の浄土教学においてさかんに行われた。こと聖岡にかぎってみても、数多くの論文が発表されている。いずれも資料紹介の域を出るものではないが、現在にいたるまでこれ以上の研究の隆盛と進展はみられない。なかでも、まとまつたかたちで鵜刻と解題を収載する高瀬承厳編『麗気記私抄・麗気記拾遺抄』(森江書店 一九三三・一〇)は、いまなお依拠すべき活字資料となっている。しかし、これは底本とした國學院大學図書館蔵本を訓み下す形式をとっており、厳密な鵜刻とはいえない。その後、『麗気記拾遺鈔』のみ神道大系『真言神道(上)』に収録され、『麗気記私鈔』もようやく原本の忠実な鵜刻がなされつつあったがなお未完のままである。その他、聖岡には『麗気記』『神体図』に関する註釈書『麗気記神図画私鈔』がある。聖岡の『麗気記』に対する見識は、『日本書紀私鈔』『古今集序註(了普

序註)』においても随所で援用され、最近注目を集めているその資西誉聖聡(一三六六—一四四〇)の著述にも継承される。資料が出揃ったところで、『麗気記』本文とのより有機的な解読と、聖岡ら浄土教家による神祇教学のさらなる究明が期待される。

良遍述『麗気聞書』『麗気記抄』(応永二六年(一四一九))

天台僧良遍(生没年不詳—応永年間ごろ活動)はその素性は未詳ながら、『日本書紀』『麗気記』に関する講述書がまとまったかたちで伝存することから夙くより着目された。

久保田収『中世神道の研究』(神道史学会 一九五九・一二) 初出は一九五六・五)では「麗気神道の紹述者」として採り上げられたのをはじめ、言説分析や書誌的考証が相次ぐ。

『麗気記』についての講述書である『麗気聞書』『麗気記抄』とも別立てにて神道大系『真言神道(上)』に収録されている。両書とも内容的には大略同文だが、巻排列などの点で系統を異にする。うち、『麗気記抄』(承応三年(一六五四)写)が異系統を装う結果になった背景には、その伝写過程がもつばら近世以降であることを考え併せると、当時一般に通行していた『版本系』『麗気記』の巻排列に改編された可能性がきわめて高い。げんに、巻首題には「麗気聞書」とある。つまり、『麗気記抄』という標題は改編

過程でつけられた後題にすぎず、原題はやはり『麗気聞書』と看做すべきところである。

ちなみに、応永二六年（一四一九）の成立となる『麗気聞書』は『日本書紀聞書』と併せて、良遍と師資の關係にあった頼舜の筆録にかかるところから、「頼舜」の記としても知られていたらしい。高野山宝亀院蔵『神道和尚書目録』（永正一六年「二五一九」奥書、『密教研究』第三五号所収）中に「神代両卷口決二帖天台宗頼舜記之／麗気十八卷聞書二帖同作」とあるほか、室町後期の雑纂書『楊鳴暁筆』附載「追加」記事（江戸後期の後補とされる）のうちにも「頼舜之麗気ノ聞書」との引用が確認される。また、近世高野山の学匠隆僊による『麗気記』註釈書ではこの『麗気聞書』にもとづいて考証がなされるなど、後代においても比較的利用された形跡が認められる。

なお、応永三二年（一四二四）の講述にかかる『神代卷私見聞』巻下の後半部『麗気事』以下は『麗気記』の註釈に宛てられており、その所説は『麗気聞書』とも重なる。そのうえ、『麗気聞書』中には「神代聞書ノ如シ」と述べ、『日本書紀聞書』と重複する所説を省略する箇所が随所に見受けられる。したがって、良遍の神祇思想は神代紀に関する複数の講述文献を相互補完的に解析していく必要がある。

※神仏習合研究会編『校註解説・現代語訳『麗気記I』（法蔵館二〇〇一・八）所収、拙稿「中世における『麗気記』註釈」参照

四 中世註釈のゆくえ

最後に、〈註釈〉という概念に関する問題について採り上げることにしたい。というのは、中世における註釈という営為と現在のそれとの間には明らかな位相差が認められるからである。現在いうところの註釈とは、もっぱらその本文内容を実証学的に読解するためのものを指す。つまり、註釈は本文批判の上に立脚した一つの研究方法として確立される。ところが、『麗気記』にかぎらず中世に横溢する註釈群は、明らかにその指向性を異にする。中世の註釈は、先行するテキストをその時代環境の文脈において読み替え更新していく積極的な言語行為としてあった（げんに、秘訓によって原典の字句じたいを改変させる場面すらある）。その点、それは註釈者による思想表現の場であったともいえる。中世の神道や文学に対する近世国学あるいは近代以降発達した古典実証主義的立場から見れば、こうした中世の註釈群はたしかに註釈の範疇からは除外視されるべきものであったかもしれない。ただし、中世という時代を対象とする以

上、それが中世の学問形態であり、〈註釈〉という営為のあり方であったことは見定めておく必要がある。さもないと、中世に簇出した『日本書紀』註釈群がかつて「今日読むに値するものは一つもない」という烙印のもとに等閑視されてきた陥穽をくりかえし（拙稿「中世日本紀」研究史——附・研究文献目録抄』『国文学解釈と鑑賞』第六四卷三三号 一九九九・三参照）、ひいてはそこに「思想」などあるものかなどといった愚問を呈することにもつながりかねない。それは、〈註釈〉という営為をひとえに訓詁学的・実証学的なものとしか認識しない、現代の発達史観がもたらす偏見を示してあまりある。

それでは、中世の〈註釈〉をいかに扱うべきか。第一に考えられるのは、原典そのものを読み理解すべく享受史・註釈史の一環として活用する方法である。しかし、中世びとの指向した〈註釈〉を現代の文脈で捉えなおすことには、少なからず限界を覚えることとなる。その間隙を埋めるには、前時代の〈註釈〉を踏襲しあらゆる展開を遂げつつも〈註釈史〉を形成しうる方法論が前提として要求されるからである。ところが、『麗気記』にまつわる〈註釈〉にはそのような前提条件を十分に備えてはいない。いわば、現行の辞書レベルの語註と中世の〈註釈〉とが相ならぶことに対する違和感ないし不調和音が生ずるゆえんもそこにあ

る。

ここに〈註釈〉の方法論をめぐる第二の方法が摸索されることとなる。それは、〈註釈〉をただ原典に附随するものと看做す以上に、一つの文献資料として、つまりは「つけられた」註釈ではなく「つくられた」註釈として読みなおす視点である。中世において紡ぎ出された言説を一概に現代の文脈に還元するのではなく、それをありのままの相として解き明かしていくことが求められる。ともあれ、中世における『麗気記』の“実像”（というよりは、むしろ“幻像”というべきか）を見届けるためにも、これら〈註釈〉の解読は必須の作業となるはずであろう。たしかに、中世の〈註釈〉にみる言説は断片的にすぎ合理的には理解しあぐねるところがある。しかし、だからこそ、そうした言説を丹念に解読することで、透視されるべき《麗気記像》が浮かび上がってくるにちがいない。むしろ、かりに《麗気記》的世界なるものを構想するとしたら、それは註釈されることによってはじめて立ち現れてくるものではないだろうか。

〔附記〕本報告は、二〇〇〇年度早稲田大学特定課題研究助成費による研究成果の一部である。